



360°からの目線

先月号では、Off West End(フリンジシアター=中、小規模の劇場)について触れました。劇場は舞台と観客席の位置関係によってプロセニウム形式と非プロセニウム形式の劇場に分けることができます。

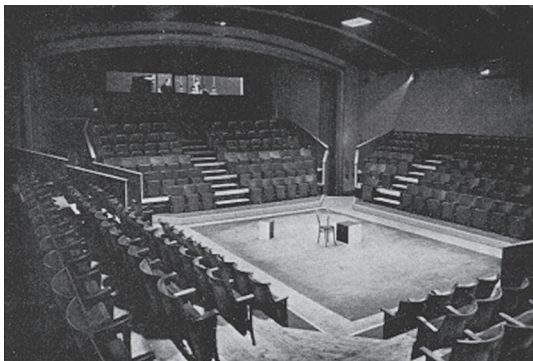
非プロセニウム形式の劇場は、プロセニウムをもたず舞台と客席が1つの空間と共存している劇場です。Off West Endでの典型的な客席形式には、主にEnd On(日本ではEnd Stageと言われている)は、プロセニウムに近い形になっていて、プロセニウムがなく長方形の空間に舞台と客席が設けられている形です。

Thrust Stageは、舞台の三方が客席に囲まれている形で突き出し舞台と言ひ、また別名Three Side Stageと言われています。

Transverse Stage(対向ステージ)、舞台を客席が前後2方向から挟む形式(Center Stageとも言います)、そして、Theatre in the round舞台の囲み角度が360度で舞台の周囲すべてを観客が取り囲む形です。総称して、Arena Stageと言っています。

今回、イギリスの小劇場で頻繁に活用されているTheatre in the roundについて触れたいと思います。

Theatre in the roundは照明家にとって、難関が多い客席スタイルと言えるでしょう。サイドライト、逃がしライトは使えないですし、つり込む照明の量がEnd onスタイルより2~3倍も多いのです。明かり作りの時間も、1カ所に座ってられません。難関が多い



イギリスで初のTheatre in the roundフリンジ劇場
Stephen Joseph Theatre 1955

分、工夫を凝らして出来る物は、とても面白みがあります。

このTheatre in the roundの客席スタイルは、古代ギリシャやローマの時代によく使われていたようですが、その後プロセニウムアーチ劇場(End onスタイル)が支流になり、Theatre in the roundスタイルは20世紀後半まで発展することはなかったようです。イギリスではシェイクスピアのグローブ座劇場(1599年~)あたりから使われるようになりました。

大空間のArena stageとは大分雰囲気は違いますが、フリンジシアターでの360°の客席の良いところは、なんといっても客席からステージまでの距離の近さ、迫力、観客とステージの一体感だと思います。演出はどの角度から見ても障害がないよう、慎重に立ち位置、動きの振り付けがされます。役者の向いている方向、立ち位置が常に入れ替わり立ち代わりする中で、照明とスペースがそれに連鎖するダイナミックさが、面白みの1つだと思います。

イギリスで活躍されているアメリカ人照明デザイナー、ジャッキー・ステインズさんが出版した“Lighting Techniques for Theatre-in-the-round”という本があります。この本の中で、彼女はTheatre in the roundで照明をするとき、このようなことを心がけていると述べています。

地明かりを最低3方向から、または4方向から作ります。ある角度からはフロントライトでも、逆側に座っている人にはバックライトになります。それを踏まえた上で、コントラストが出せる色と光量を選ぶ。キーライトは一方から当てるにしても、時間



Theatre in the roundでの演目
『Kill Me Now』in Park Theatre 2015

差で方向をローテーションさせます。つまり、同じねらいで使われるキーライトも、最低2方向から時間差で当てます。それによって、どこかの角度から見ても、同じような効果が得られます。当たりハズレの客席/角度がないように。セットもTheatre in the roundでは、かなりミニマリズムになるため、シーンのロケーションを表現する上で、照明はかなり重要な要素になってきます。そのような理由もあるため、演劇をTheatre in the roundでやるときは、ほとんどがナチュラルスティック照明(抽象的な照明と対照的で、現実を再現しようとする照明)になる傾向があるそうです。

Theatre in the roundとEnd onの最大の違いは、Theatre in the roundになってくると、対話している2人が向き合って話している場合、1人の顔はよく見えても、もう1人の顔はほとんど見えないことがよくあります。普通のEnd onですと、役者は客席に背を向けないというのがほとんどだと思いますが、Theatre in the roundは必ず、誰かの背中を目にするため、役者の動きや仕草が自然体に見えてきます。顔が見える役者は、背を向けている役者より遠くにいることが多いので、その分、遠近感と舞台の奥行きが出てきます。光量で、遠くの顔を引き立たせ、近くの中を和らげる。どこかの角度からも、気を抜けない、とても奥が深いTheatre in the roundです。